

歌詞の解釈を通した言語感覚の育成

—合唱曲「ハックルベリーの瞳で」を題材として—

丸田 健太郎

1 はじめに

現行の小学校学習指導要領において、国語科の目標のひとつに「言語感覚を養うこと」が挙げられている。言語感覚とは、小学校学習指導要領解説国語編のなかで以下のように設定されている（文部科学省, 2018:13）。

言語で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜などについての感覚のことである。話したり聞いたり書いたり読んだりする具体的な言語活動の中で、相手、目的や意図、場面や状況などに応じて、どのような言葉を選んで表現するのが適切であるかを直観的に判断したり、話や文章を理解する場合に、そこで使われている言葉が醸し出す味わいを感覚的に捉えたりすることができることである

このような言語感覚を養うことは、言葉を享受する際の感覚の共起をより豊かにし、刺激を受容した後の発信・表現の基盤になると考える。また、このような言語感覚の豊かさを育むためには、国語科で中心となっていくことばを用いた表現だけでなく、ことばを用いる際に同時に行う、身振りやなどの身体の動き、表情などのノンバーバル・コミュニケーションも射程に含むことが必要であると考え。人が何かを表現するとき、文字化することが可能なことばだけでなく、抑揚なども含めて他者は表現を受け取り、解釈するからである。このような他者にとっての解釈を想定することにより、言語活動における直感的な判断や感覚的な捉えを意識することができると考える。

本実践では、国語科と音楽科による単元を設定し、合唱祭での歌唱という目標に重ねて、自分たちのクラスらしい表現の在り方を追求することを目指した。

2 実践学級について

本学級の児童は、学習に対し意欲的な態度をもつことができている。児童同士の関係においては、男女隔てなく関わりを持つことができているが、うわべだけの関係になってしまい、学級の一体感や所属感を持つことができているかは個人差が大きいように見える。また、大人のいうことを無批判に受け入れてしまい、いわゆる「よい子」として自身の感情を抑圧するような様子も散見される。最高学年である6年生への進級や中学校への進学を見据え、他者と共同したり互いを認め合ったりすることができるような雰囲気を作っていきたいと考えている。

特に、本校における第5学年は、中学受験を目の前にし、学校や塾での成績が他者を評価する大きな指標になっているという現状がある。また、親からの期待も大きく、周囲の大人の期待に応えようと自らのふるまいを制御する意識が強くなっていく時期であると言える。本学級の児童においても同様であり、自身の課題に向き合うことからの逃避行動、学力による他者評価や自己肯定の意識がみられる。

思春期を迎え、心身が大きく成長する時期だからこそ、様々なことを無意識に受け止めるのではなく、時には自身の感情に正直に生きながら、自己を表現することができるようになってほしいと考える。

3 歌詞を解釈する実践

(1) 題材の目標

○歌詞の解釈をもとに、その世界観を吟味し、自身の考えを整理したり表現したりすることができる。(国)

○主体的に歌詞から感じ取ったことを自分の言葉で表現し、その解釈にふさわしい表現を工夫して歌う楽しさを味わうことができる。(国・音)

(2) 題材観

題名にもある「ハックルベリー」とは、ブルーベリーに似た小さな果実のことであり、その色や形と人間の瞳を重ね合わせるように比喻している。詞には「君」「僕」「少年」という名称が登場し、中心に描かれている人物と語りかける人物の相対的な人物像を読むことができる。この語りかけるような人物の存在については、国語科の学習で言えば語り手と似た機能を持っており、「ごんぎつね」など、これまでの学習事項を活用することができる。

1 番の歌詞では、「背中の重い荷物」「大事な釣り竿さえ捨てて」など、負の感情を抱かせるような歌詞が続いている。一方、「空へと解き放つのさ」など、負の感情に縛られながらも、明るい世界へと踏み出していく様が表現されている。その部分は、2 番に向けての滑走路として読むことができ、2 番の冒頭と比較してその世界観の明るさや奥行きを感じることができる。

2 番の歌詞では、「生まれてきたついでに生きる なんてもう誰にもできっこない」という詞から「命はどんなときも夢と冒険を探してる」という詞につながっており、物語として捉えた際には若干の飛躍がみられる。ただ、2 番の後半では1 番の後半よりも明るく受け取ることができるような歌詞が歌われており、全体を通してみると多少の起伏はあっても上に向かうような構成になっていると言える。

国語科としては、「僕」の心情の変化に着目させ、人物の背景を想像することに重点を置きたい。そして、ただ心情を想像し、言葉にするのではなく、児童自らの実体験を伴う解釈につなげていきたい。歌詞の中には正負の感情が入り乱れており、「僕」

が生きる中で様々な葛藤を抱えている様子が垣間見える。児童にも同様に、「僕」の心情が明るい方向に進んだという結果だけを見るのではなく、そこに至るまでの過程や負の感情への想像を膨らませ、解釈を広げさせたい。このようにすることで、音楽科でのより豊かな歌唱表現につなげることができると考える。

(3) 本時の目標と展開

○ 「僕」の心情が変容する過程に着目して解釈を深めることができる。

本時の展開

学習活動	指導の意図と手立て	評価基準
1 「ハックルベリーの瞳で」の歌詞を黙読し、どのような印象を持っているか整理する。(2分)	○明るい暗い、最初から最後まで一貫した心情があるかなど、二項対立的に問いかけ、この歌詞の中で気持ちの変わり目があることやグラデーションがあることを意識させる。	
「僕」の気持ちの変わり目に着目して心情を想像しよう		
2 歌詞から、「僕」の人物像を想像し、解釈を交流していく。(8分)	○「僕」という人物が悩みを抱えており、置かれている状況に満足しておらず、苦しみを抱えていることに気づかせる。 ○「僕」の心情を追体験するとともに、「僕」のことを理解できるか問いかけ、学習者自らの経験との接続を図る。	歌詞を解釈し、自らの経験などと結びつけて想像することができている。(発言、ノート)
3 1番のAメロに着目し、自分が合うと思う色の色紙を選ぶ(15分)	○色の違いや濃淡を意識して選ばせる。 ○その色を選んだ理由について、歌詞を抜き出しながら説明できるようにする。理由まで書くことができたなら、黒板に貼る。	歌詞を大切にし、理由を考えることができている。(発言、プリント)
4 全体の色の雰囲気から、この曲の冒頭の「僕」の心情がどのようなものであるか意見を交流する。(10分)	○冒頭の心情を読み深め、やや暗い印象であることを共有させる。 ○「僕」の心情が歌のなかで変わっていたという授業冒頭での読みを振り返り、どこでどう変化しているのか想像させる。	

本実践を通して、児童は歌詞に描かれた内容を物語として受け取り、「僕」という人物の変容を考えることができた。手立てとして用意した色紙を貼るという活動により、選んだ色を自身の解釈の象徴として位置づけたり、色から解釈することばを紡いだりすることができていた。

一方、この時点では「僕」という人物と自分自身を重ねるような視点はあまり持つことができておらず、作品の世界を対象化している児童が多く見られた。音楽科での表現を繰り返し探求していく学習活動を通して、「僕」に同化し、その心情の揺れ動きを自身の経験や感覚をもとに考えることができるよう、単元を進めていくことにした。

4 歌詞の解釈をもとにした詩創作の実践

本校の合唱祭では、各学級が発表をする前に楽曲紹介という時間がある。楽曲について紹介するとともに、この歌に学級でどのように向き合ってきたのかを発表する時間である。2分程度の短い時間ではあるが、学級によってスピーチをしたり呼びかけをしたり劇をしたり、各学級の特色が表れる時間でもある。

本学級では、これまで国語科と音楽科が連携をした単元を通して学びを深めてきた「ハックルベリーの瞳で」との関わり方を伝えるための方法として、詩を朗読するという形式を選択した。これは、国語科の授業で歌詞の解釈を行った際に、児童は詩を読むように自由に解釈しており、ことばという制限から解き放たれたような読みをしてほしいという担任の願いも反映している。

当初は、「ハックルベリーの瞳で」の作詞をした作詞家の他の作品から朗読する詩を選ぼうと考えたが、この歌詞の中から物語を見出している児童にとって、既存の作品は今持っている作品世界と干渉してしまうと考え、学級で詩を創作することにした。また、ここで創作する詩は五行詩とした。行数を指定し、表現に制限をかけることで、聞き手に解釈の幅をもたせることができると考えた。当日の表現についても、表現の意図を先に説明するのではなく、歌唱という表現と身体の動きを通して伝えることを目指した。

詩の創作にあたって、児童に楽曲紹介としてどのようなことば（単語）を使いたいのか問い、Google form を用いて集約した。さらに、歌詞中の「ぼく」の心情が変容していることを踏まえ、五行のなかで気持ちが沈んでいることを表現している行と、気持ちが上向きになっている行を考え、詩の構造を決めた。

一行目は歌詞の冒頭が問いかけのように解釈されることを反映して、問いの文章をいれることにした。正と負の感情が入り乱れていることを表現するために、逆接表現を用いるというアイデアが児童から出たため、二行目から四行目に採用した。そして、最後の五行目には、歌詞の「ぼく」と自分たちを重ね合わせるために、「ぼくら」という単語を使うことにした。

その後も話し合いを繰り返し、右のような詩が完成した。

さらに、当日の発表者は希望者の中からオーディション形式で決定した。児童には、クラスの代表として、この詩を読むのにふさわしいと思う人に投票するように伝え、1名の児童が選ばれた。その児童は普段、このような代表などに立候補するような児童ではなく、後日どうして立候補したのか尋ねると、「この詩だから読んでみたいと思った」と話した。

【2部5年楽曲紹介の詩】

今	前	自	冒	成
ぼ	が	由	険	長
く	み	に	し	し
ら	え	な	た	た
は	な	り	い	ら
	い	た	い	
夢	け	い	け	希
に	ど	け	ど	望
向	挑	ど	前	が
か	戦	な	に	見
っ	し	れ	進	え
て	た	そ	め	る
	い	う	な	の
		に	い	だ
		な		ら
				う
				か

5 児童の記述の分析

以上のような実践を行った結果、児童は「ハックルベリーの瞳で」をどのように解釈し、表現の創意工夫を考えたのか、児童の記述から分析を行う。

ここで取り上げるA児は国語科での歌詞の解釈の際には、「最初のモヤモヤしたむらさきからサッパリしたようなうすいピンクに変わっている。二部合唱（2番）の所から元気になっている」と書いている。解釈の初期から人物の変容を捉えていることがわかる。

次に、この児童に「歌に出てくる『僕』の心情を演技（表情）や歌で、どのように表そうとしましたか」という問いを単元末に出したところ、以下のように記述した。

僕は、最初の方は元気がなくて、さびしそうな感じでした。しかし、曲の中の二部合唱が始まったら僕の気持ちもどんどん明るくなって行って、1番の「とき放つのさ」と2番の「心のままに」の所から元気になっています。

なので、最初は暗くさびしそうな声で、二部合唱の部分では、力強くひびく声で、サビは元気に楽しそうに歌いました。

さらに、合唱祭本番のクラスの合唱について問うと以下のように記述した。

みんなで声をよせて、上手によくひびく、やさしくて元気な声で歌うことができました。そして、いままで練習でやってきた、「さけんでいる人がある」や「一人だけ声大きい」という問題をクリアすることができたと思う。

この児童の記述からわかることは、歌詞の解釈がただ言語にとどまらず、そこから想起される感情や歌い方にまで意識が向けられているということである。このような表現にまで意識が向けられた背景には、音楽科と連携して一つの題材（本実践では「ハックルベリーの瞳で」）を児童と共有しながら、多面的に捉えたという授業の構成が影響していると考えられる。これにより、学びを蓄積する児童の内面ではそれらが結びつき、解釈の表現や歌唱表現という形式で表出されたと考えることができる。

加えて、この児童が本番での合唱を振り返りながら集団としての表現について言及していることにも触れたい。歌詞の解釈はそれぞれの児童の個の考え方を前提としていたが、歌唱、特に合唱という表現では学級集団のまとまりが必要になる。

歌詞の解釈を個別に行うことは、歌唱表現としても個の表現となり、統一性がなくなってしまうということも危惧される。しかし、今回の実践では、それぞれの解釈を前提に歌の授業や詩の創作を行ったことにより、それらが大きくまとまり、互いの個性性を担保しながらも表現としては学級集団を意識する表現につなげることができたと考える。

6 おわりに

本実践では、歌詞の解釈と歌唱表現の有機的な結びつきを土台に、児童の言語感覚を育成することを目指した。この実践では、児童自らが歌詞の意味を追求し、自分たちに置き換えたり相対化したりしながら解釈を深めていく様子を見ることができた。このような、ことばを用いて解釈を深め、表現に創意工夫を凝らす児童の姿は、ただことばを発信したり享受したりするのではなく、その質感や感性を感覚的に実感することを求める姿であったといえる。このような児童の姿から、言語感覚を豊かにし、自身のことばを探索することの意義を捉えることができると筆者は考える。

永田（2020：43）は「言語行為について、言語主体が社会を反映した言語を用いるのではなく、言語を使用することによって社会がつくられ、言語主体をも構築されていくと考える学問領域」である社会言語学を手がかりに、国語科における言語感覚の育成について言及している。永田の研究は多様な性に関わる一連の研究であるが、国語教育における言語感覚の育成の裾野を拡張する点や、文学の学びを援用する可能性を示している点において、本実践との結節を図ることもできると考える。

学級の合唱曲という題材であることから、学級という社会集団にどのように参与するかが児童には求められた。その過程で児童は自身の感覚や感性をことばにし、表現した。この表現を学級の児童たちは受け取り、新たな社会を構築していく。学級という社会と一人ひとりの個人を結び付ける一連の言語活動が教育営為となり、他の社会集団にも生かされる言語感覚を涵養していると考えられる。

今後は、造形科など他の教科や場を想定しながら、言語感覚を育成するための授業方法の開発や資質・能力の評価についても研究を進めていきたい。

参考文献

永田麻詠（2020）「国語科教育における多様な性への対応と言語感覚の育成」『国語科教育』88,39-47.

文部科学省（2018）『小学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版社